



謹んで中国二億の女性同胞に告ぐ

秋 瑾

(訳 萩田麗子)

ああ、世の中で最も不公平な事といえば、それは我々二億の女性同胞の事である。生まれ来てから好い父親に巡りあうのはまだいいとして、性格が荒く、人情や道理を重んじない父親に巡り会ったら、口から出るのはすべて「しまった、運が悪い。また役立たずが生まれた。投げ殺したいくらいだ」というようなことばかりで、いつも「いつかはよその家の者になるのだ」という言葉を抱え、冷ややかに見て冷たく取り扱う。まだ年端もいかず善悪の区別もつかないときに、娘の二つの真っ白で柔らかな生まれたままの形をした足に白い布を巻き付け、眠る時にも決してほどくことを許さず、後には肉が腐れ骨も折れ曲がってしまう。彼らはただ親戚、友人、隣人に「どこそこの家の娘の足は小さい」という一声を言ってもらいたいだけなのだ。

これだけではない。嫁にやる時がくると、恥を知らない双方の仲人によって男の家が金持ちで勢力があることだけが問われ、彼やその家族がいい

人であるかどうかや、夫になる者の性格の良し悪し、学問の程度が聞かれることはなく、いつのまにか話が決まっている。結婚して家を出るとき、華やかに飾られた嫁入りの輿の中に座り、花嫁は息を出す勇気もでない。

ここに至り、もしもそれほどでもない夫に巡り会ったとしても、まじめで悪いことをしない夫であれば、前世の福をこの世で受け取っているとみなされる。だが、よくない夫に巡り合ったら、「前世で罰当たりなことをした」、と言われるのでなければ、「運が悪かった」と言われる。もし一言二言恨み言を言ったり夫に意見をしようものなら、「とんでもない話だ」と叩かれたり罵られたりして、これを聞いた者が「善良で優しくない、女の道を知らない」と言うこともある。

各位。聞いてほしい。これはまったく不当なことだが、どこに訴えたらよいのだろう。

もうひとつ不公平な事がある。夫が死ぬと妻は三年の喪に服さなければならぬし、再婚は許されない。だが妻が死ぬと、夫は何本かの青い糸を弁髪に巻き付ける〔服喪の気持ちを示す行為〕だけでよく、みっともないと思う者は糸を結ぶことさえしない。そして妻が亡くなってまだ三日も経っていないのに他の女性と関係を持ち、四十九日も過ぎぬうちに、次の花嫁がやってくる。

神が人をつくったとき、もともとは男と女には区別がなかった。試しに聞くが、もしもこの世に女がいなかったとしたら、これほどの人間が生まれるだろうか？

なぜこのように不公平なのか。いつも「心は公のもの。人に接するには穏やかに」と言っている男たちが、女をアフリカの□□（2字伏字）のようにみなし、ここまで不当に不平等に扱うのはなぜなのか？

各位。あなたは知らなければならない。この世のことを人に頼るのはよくないことで、いつも自分を頼りにすることが是であることを。「男は尊く女は卑しい」とか「女は才能がないのがすなわち徳である」などとくだ

らない学者たちが言う時、我ら女が気概を持っているのならば、これらのでたらめな話をする学者に反対するよう同志に呼びかけるべきだ。

我らがもし恥を知るのならば、陳后主が始めたこの纏足の罪を大々的に問うべきだ。もし私たちが反発したとすれば、それでも彼らは足を縛るだろうか。縛らせることなどできないのだ。〔※纏足の習慣は南唐の李后主が始めたと言われている。秋瑾は南朝陳皇帝の陳后主が始めたと誤って記している。（訳者注）〕

男は、我々が知識を得、学を得、彼らの頭の上に上るのを恐れるから、我々が学を求めるのを許さないのか。我々が彼らと争うことができないとも思っているのだろうか。争わずに服従していいいいのか？

こうなったのは、我々女がずっと自ら責任を放棄し、様々なことを男がやるのを見るや、これ幸いとなまけて楽に暮らそうと思ったからである。

男が「お前は役立たずだ」と言ったら自分は役立たずの人間なのだと思います、「お前はだめだ」と言ったら、ただ目の前の楽な生活を保つために奴隷になる。それならそれでいいだろう。

労せずして報酬をもらい、それが長く続かないのを恐れるあまり、男が足が小さいのを好むと聞くやいっしょうけんめい縛って男が見て喜ぶようにし、どうにかこれを利用して^{ただ}無料飯を食う。我々に勉強させず、字を習わせないにいたってはさらにけっこうなことはないか。（何もしないでごはんが食べられるのだから）何も反対する理由はない。

だが各位、ちょっと考えてほしい。この世に、働かなくて享受できる幸福というのがあるのだろうか？

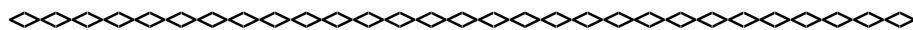
学問があり見識があり、力を尽くして事を成す男が権利を得、我々が彼の奴隷になったのは当然のことだ。彼の奴隷になったからには、抑えつけられるのは当然のことだ。自業自得なのだから人を怨むことはない。これらの事柄に触れることは、私も辛い。

各位。考えてみてほしい。賢明な人に、私が細かく言う必要はないだろう。しかし、これからのことを私はさらに我が姉妹たちに望む。昔の自分

は死に、いま人間として生まれ変わったのだという風にしてこれまでのことをすべて押しつけ、これからのことを、全力を尽くしてやり続けることを望む。年をとった女性は、「老人は無用」と言わないようにしなければならない。いい夫に会ってもし彼が学校を開くなら、彼を阻んではならない。息子が留学したいと言ったらよし、彼を阻んではならない。中年の嫁として、いつも夫の足手まといになって、彼を息切れさせ志をしておれさせ、功成らず名をとげさせないようなことがあってはならない。息子を産んだら、彼を学堂に通わせ、娘であってもこのごとく、決して纏足をさせてはならない。幼年の娘は、もし学堂に行ければいい、たとえ行けなくとも家で常に書を読み、字を学ばなければならない。金のある官吏であれば、夫に学校を開くこと、工場を興すことを勧め、普通の人々の役に立つことをしたほうがいい。金がない者は、夫を助けて一生懸命働いたほうがいい。なまけて無駄飯を食ってはならない。これが私の望みだ。

みなさん、国が滅びるのは明らかで男が自分を守れない時に、我々はまだ男に頼ろうと思っているのか。我々がもし自分を奮い立たせなければ、亡国の時が来てからでは遅すぎるのだ。各位！ 私を決して失望させてくださるな。そうであれば幸いである。

.....
秋瑾(1877-1907) : 浙江(紹興)の人。詩人、清朝末期の革命家。1904年日本に留学。帰国後革命運動に加わったが、1907年に捕らえられ、7月15日、斬首、処刑された。本文は秋瑾が日本留学中に発刊した『白話』の第2号(1904年10月)に掲載されたもの。本訳に使用したテキスト: 『秋瑾選集』, 北京, 人民文学出版社, 2004, pp. 3-5.



唉！世界最不平的事，就是我们二万万女同胞了。

从小生下来，遇着好老子，还说得过；遇着脾气杂冒、不讲情理的，满嘴边说“晦气，又是一个没用的。恨不得拿起来摔死。”总抱着“将来是别人家的人”这句话，冷一眼、白一眼的看待；没到几岁，也不问好歹，就把一双雪白粉嫩的天足脚，用白布缠着，连睡觉的时候，也不许放松一点，到了后来肉也烂尽了，骨也折断了，不过讨亲戚、朋友、邻居们一声“某人家姑娘脚小”罢了。

这还不说，到了择亲的时光，只凭着两个不要脸媒人的话，只要男家有钱有势，不问身家清白，男人的性情好坏、学问高低，就不知不觉应了。到了过门的时候，用一顶红红绿绿的花轿，坐在里面，连气也不能出。

到了那边，要是遇着男人虽不怎么样，却还安分，这就算前生有福今生受了。遇着不好的，总不是说“前生做了孽”，就是说“运气不好”。要是说一二句抱怨的话，或是劝了男人几句，反了腔，就打骂俱下；别人听见了还有说：“不贤惠，不晓得妇道呢！”

诸位听听，这不是有冤没处诉吗？

还有一桩不公的事；男子死了，女子就要带三年孝，不许二嫁。女子死了，男人只带几根蓝辫线，有嫌难看的，连带也不带；人死还没三天，就出去偷鸡摸狗；七犹未尽，新娘子早已进门了。

上天生人，男女原没有分别。试问天下没有女人，就生出这些人来么？为什么这样不公道呢？那些男子，天天说“心是公的，待人是要和平的”，又为什么把女子当作非洲的□□一样看待，不公不平，直到这步田地呢？

诸位，你要知道天下事靠人是不行的，总要求己为是。当时那些腐儒说什么“男尊女比卑”、女子无才便是德”、“夫为妻纲”，这些胡说，我们女子要是有志气的，就应当号召同志与他反对。陈后主兴了这缠足的例子，我们要是羞耻的，就应当兴师问罪；即不然，难道他捆

着我的腿？我不会不缠的么？

男子怕我们有知识、有学问、爬上他们的头，不准我们求学，我们难道不会和他分辩，就应了么？

这总是我们女子自己放弃责任，样样事体一见男子做了，自己就乐得偷懒，图安乐。

男子说我没用，我就没用；说我不行，只要保着眼前舒服，就作奴隶也不问了。

自己又看看无功受禄，恐怕行不长久，一听见男子喜欢脚小，就急急忙忙把他缠了，使男人看见喜欢，庶可以藉此吃白饭。至于不叫我们读书、习字，这更是求之不得的，有什么不赞成呢？

诸位想想，天下有享现成福的么？

自然是有学问、有见识、出力作事的男人得了权利，我们作他的奴隶了。既作了他的奴隶，怎么不压制呢？自作自受，又怎么怨得人呢？这些事情，提起来，我也觉得难过。

诸位想想总是个中人，亦不必用我细说。但是从此以后，我还望我们姐妹们，把从前事情，一概搁开，把以后事情，尽力作去，譬如从前死了，现在又转世为人了。老的呢，不要说“老而无用”，遇见丈夫好的要开学堂，不要阻他；儿子好的，要出洋留学，不要阻他。中年作媳妇的，总不要拖着丈夫的腿，使他气短志颓，功不成、名不就；生了儿子，就要送他进学堂，女儿也是如此，千万不要替他缠足。幼年姑娘的呢，若能够进学堂更好；就不进学堂，在家里也要常看书、习字。有钱作官的呢，就要劝丈夫开学堂、兴工厂，作那些与百姓有益的事情。无钱的呢，就要帮着丈夫苦作，不要偷懒吃闲饭。这就是我的望头了。

诸位晓得国是要亡的了，男人自己也不保，我们还靠他吗？我们自己要不振作，到国亡的时候，那就迟了。诸位！ 诸位！ 须不可以打断我的念头才好呢！

□□□□□